

(globalization) がある。十年程前であれば「国際化」(internationalization) 五年程前であれば、

「ボーダレス」(borderless) という言葉が使われていた。日本では「グローバリゼーション」はどのように使用されるようになったのだろうか。

どんな言葉も定着するまでには様々なプロセスを辿る。「グローバリゼーション」の定義や見解を時系列的に見て行くと、まず英語の表記ということから、英語で最も権威のある *The Oxford English Dictionary* を見ると、globalization は、一九八九年の第二版では項目として取り上げられ、"the act of globalizing" と定義されている。初出の説明をみると、一九六一年のウェブスターには "Globalization" の項目があり、一九六二年十月五日の『スペクテイター』では "globalisation is, indeed, a staggering concept." という例文を紹介している。新聞記事上の使用例として、一九八三年八月の『ワシントンポスト』では、自動車産業

気になる言葉 グローバリゼーション

佐々木 隆

最近、気になる言葉に「グローバリゼーション」

の国際競争を報じた記事の中で、一九八四年七月の『フィナンシャルタイムズ』では、液体洗濯洗剤を日米別々の名前で売り出したとの記事に“globalization”の表現が使われている。

ここで様々な分野のものから「グローバリゼーション」の定義を列挙してみたい。

○グローバリゼーションとは、人・財・サービス・情報などが時間的・空間的制約を超えて比較的自由に交流するようになる過程、ならびにその政治的・経済的・社会的・文化的帰結を便宜的に表す言葉である、というきわめて緩い定義を暫定的に採用しておきたい。(中沢力「グローバリゼーションと国家」『国際問題』日本国際政治学会、一九九九年)

○英語の古い辞書には出ていない。global(地)球全体の、世界的な)という言葉から globalize

という動詞になり、そこからグローバリゼーション、つまり「世界が一つになる」というような意味の言葉になった。(今井啓一『情報文化の国際交流』学術図書出版社、二〇〇〇年)

○グローバリゼーションの特徴は、国家、国境を越えた(超国境的な)グローバルなシステムが濃淡の差はありながらもいくつかの分野で作りだされていることにある。(山本吉宣「グリーバリゼーション」。猪口孝他編『政治学事典』弘文堂、二〇〇〇年)

○現代を映し出す鏡としてのグローバリゼーションは、そもそも近代世界が創りだした知の体系、なかでも「西欧」文明の支配を正当化する文化的言説、自由と平等を標榜しながらも人種・性差別的な近代秩序を支えている歴史

認識、進歩と国益からの自由になれない社会科学全体に疑義をはさみ、「近代」を問いな
おすなかから生まれたキーワードなのである。
(佐藤幸男「国際政治とグローバリゼーション」
「国際理解のすすめ方」『国際理解』第三
十三号、帝塚山学院大学国際理解研究所、二
〇〇二年)

○最近では、「グローバリゼーション」という
用語は、経済界に限らず他のさまざまな領域
で、「グローバル・スタンダード」による地球
的統一・画一化」という意味合いで用いられ
ている。(古田暁・石井敏他『異文化コミュニ
ケーションキーワード』有斐閣、二〇〇二年)

二〇〇二年以降には『現代用語の基礎知識』を
はじめ、多くの文献に「グローバリゼーション」
は登場することとなる。当初は経済界で使われ始

めた言葉も、今や自然に受け入れられている。国八
家という枠組みから地球全体を考えるという方
向に世界が確実に動いているというのが理由で
あろうか。二〇〇三年三月に政府が発表した「今
後の国際文化交流の推進について(報告)」にも「グ
ローバリゼーション」がキーワードとして使われ
ている。言葉は時代と共に生きていくのだ。